美術月評

―4月―

星 雅彦

動的な抽象表現 人間の形態吟味

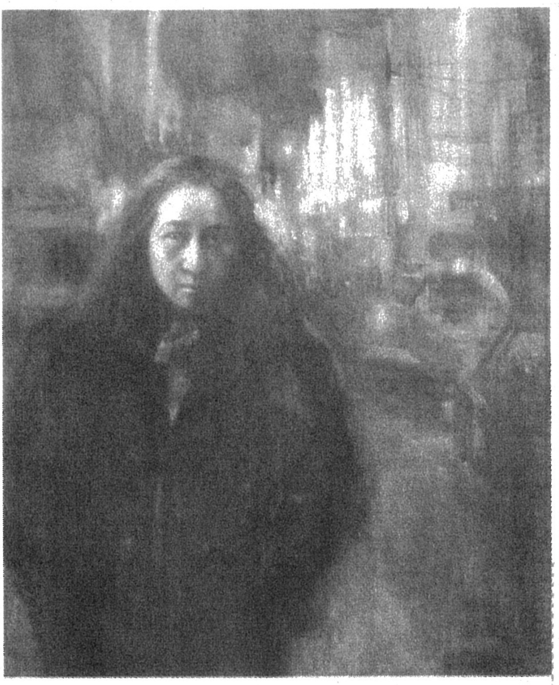
永津禎三展

高橋渉二版画展

単一形象を拡大 抽象性の魅力予見

城間喜宏展

金城規克作品展



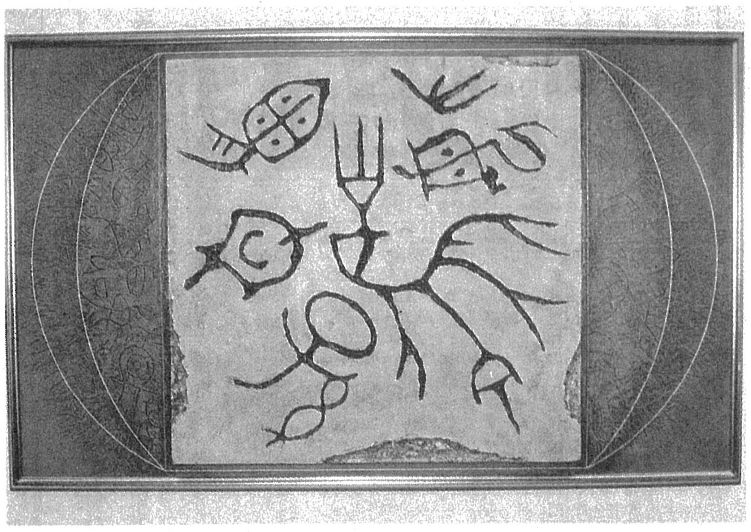
中島イソ子展から「夜II」

最近の那覇市のデパートの新設・増築等を含めての変化は、大局的にみると、沖縄の世変わりの「'91年」として捉えるべきかもしれない。今月はデパートの展示場とその内容によって、沖縄美術界にとっても様変わりの月となったと言えよう。

まず「パレットくもじ」の落成があり、その6階に那覇市民ギャラリーが移転し、記念展としての「ヨーロッパ・アメリカの版画展」の開催が挙げられる。それは十九世紀のゴヤやドラクロワから現代のウォーホールやラウシェンバーグあたりまでの版画による美術の流れを示し、適切な選抜を感じさせた。それに関連させ得るものとして、リウボウ6階催事場では、オランダの異質の版画家M・C・エッシャー展があり、その線描による奥行き深い表現と形象的な英智と秀逸な細密技法による多数の作品群の展示は、画期的な内容であった。

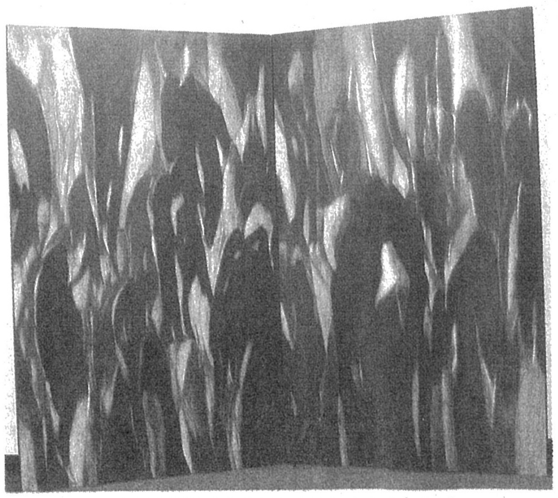
またリウボウ美術サロンではピカソ展が開かれ、新装の三越では、キャパ写真展や日本画巨匠と人気作家展が開催された。いずれも一見の価値あるものであり、急にそこいらが大都会の雰囲気を醸し出した観がある。

一方、読谷村立美術館では、一周年記念としてタイムスの旗を多くなびかせて、城間喜宏展が開かれた。浦添市美術館では、音なしの構えの永津禎三展があった。街のギャラリーの画廊サロン・ド・ミツでは、金城規克陶板レリーフ作品展、つづいて第十回中島イソ子個展があり、ギャラリーみやぎでは高橋渉二版画展につづいて下田悌三郎水彩画展があった。いずれも個性的な内容をもち、印象に残る作品も少なくなかった。



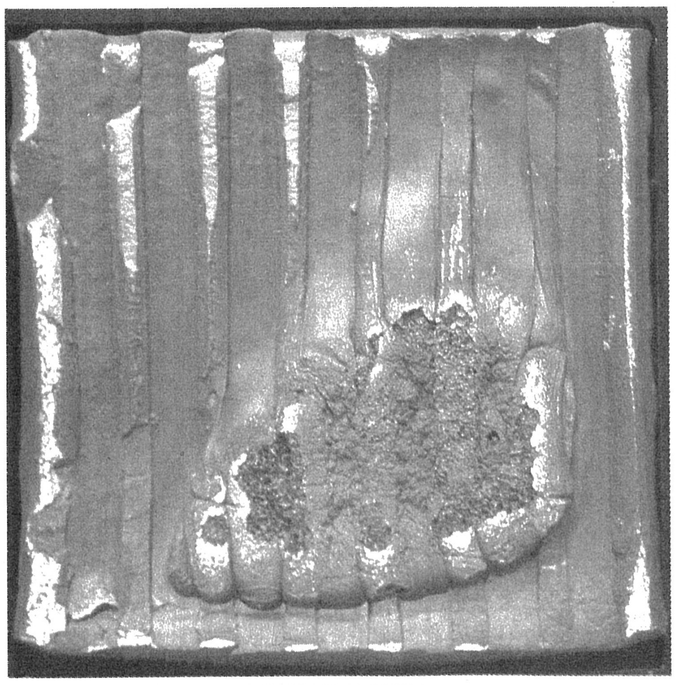
城間喜宏展から「マンダラ礁瞑想シリーズ、マーブル形象」

城間喜宏展は、第四十一回を数えるようであるが、内容的には回顧展である。'58年の第一回個展に出した「月下美人」から、饒舌シリーズ等の各シリーズの代表作品を得て、一九八〇年代前後から彼は蒼の世界に入り、象形マンダラ、宇宙と礁と瞑想の世界へと展開するのである。その前期には、亜熱帯派展に出品した「亜熱帯の島から」という墜落した米軍機の破片をあしらった物体作品がある。近年に制作したものでは、ようやく完成させたピアノの作品、また二人展出品の大嶺実清との合作「陶」の蒼い壷などもあった。新作としては去年から今年にかけての作品も若干あり、その中では、曼荼羅礁瞑想シリーズの「マーブル形象」'91が存在感を強めていた。沖展に出品した作品に蒼の深さを加筆したようであるが、部分を拡大させた形象が、表現として核心を惹起してるようにも受けとれた。そうした単一形象の拡大表現には、もしかすると一つの拓くべき道があるのかもしれぬ。また彼自らの探索を暗示しつつ、高さ4㍍に広さ25㍍×8㍍の広々とした箱空間が、それにこたえているようであった。



永津禎三展から「UTAKI series」

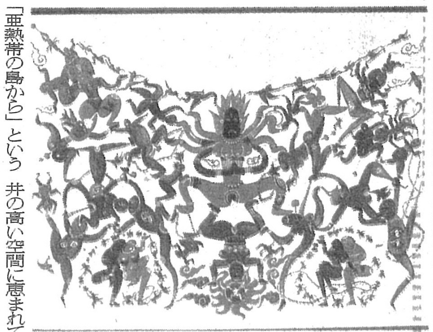
永津禎三展は、浦添市美術館という瀟洒な建物と天井の高い空間に恵まれて、その大作群が環境をとり込んでいるように緊迫感に漲（みなぎ）っていた。自主運営期間の匠画廊から数えて五年ぶりの個展で、内容も約五年間に制作した十五点の展示であった。それら作品は、いずれも地色に緑をおいて、褐色と青色の顔料を塗り込め、その変化の流れに沿って白色を刷状に走らせた一定のリズム表現であり、テンペラを用いた独自の技法を駆使していた。ほとんどはびょうぶ形態であるが、巨大なタマゴ型の鏡面を連想させる数点の楕円形の作品が特に目立っていた。それらは中世の壁面像の形象を引きずってはいないが、中には森や自然のイメージの形態をとどめた作品もあり、概して書の筆勢を思わせる動的な抽象表現である。それらは半面、同一ハーモニーの前途を案じさせ、類似性の課題を持ちつづけるであろう。ともあれ今回の個展は、控え目に着実に仕事をしてきた一つの成果を示していた。



金城規克展から「痕II」

金城規克の陶板は、人物などのレリーフの作品に今一つ物足りなさを感じさせたが、土と火に賭けた偶発性の陶板には、たとえば「痕」の作品などに抽象性の別な魅力を予見させるものがあった。そのことは、土と火が彼に造形の何かを問いかけているようにも見受けられた。

中島イソ子個展は、花と自画像というサブタイトルが示すように、九点の自画像の外は、アネモネやポピーやコスモス等々の花々を多く描いていた。それらには好みの色彩や幽玄性の深さがあり、定着したタブロー表現である。言ってみれば、深刻な暗い表情の自画像に対する執着に対し、とやかく言う筋合いはないとしても、同じく繰り返すパターンが、一種の演技に見られてくる、とすれば、損な役柄というべきではなかろうか。しかし、屈折したナルシスムスは見事に咲き誇っていて、それなりの存在感があるというべきであろう。



高橋渉二版画展から「インシャラー」

高橋渉二の個展会場に足を踏み入れる直前に、ふと八面六臂（ろっぴ）の絶えず何か表出せずにはいられない表現者を感じてしまうのは、ひとえに彼が何かにつけて印象深い個性の強さを示すゆえんであろうか。今回は版画三十点にシーサーの焼物六十点とその他である。それらは賑やかな感じで、総じて人間の赤裸々な形態を自ら吟味しているかに見えた。かつて彼はインドに旅して、古代神々の交接合体のエローラの哲理を垣間見て、ある啓示を受けたのであろう。同展の中では、異質の水彩タブローの「インシャラー」が特に目を引いた。それは赤と青の裸像の群舞の図であり、エロスをほのめかしてもいるが、渡り鳥の弛（ゆる）やかな曲線を区切りにした空間構成と、色調のバランスがあいまってパロディ的な完成度を打ち出していた。

なお、下田悌三郎水彩画展は、花や果実などを淡く巧みに描いてみせ、透明感の妙味をさらりと示していた。

（詩人）